

今思い返せば、茨中・茨高の授業は、「なるほど!」「そうなんだ!」と知的好奇心がくすぐられる面白い授業が沢山ありました。また面白いのは授業だけではなく、先生方も大変面白く、ユニークです。そのためか疑問があればすぐに質問したくなります。分からないところを、笑いを交えながら面白く、かつ分かるまでとことん教えてくれる、この環境が大好きでした。茨中・茨高は課外活動も充実しています。朝課外や放課後課外があり、思う存分学校で学習したいという人にとっては必見です。進学指導については、どの先生方も相談に応じてくれます。勉強、大学、入試など中高生活の柱となることから、人生設計の柱となる将来の夢まで、何でも相談に乗ってくれます。私自身も、学年を越えて様々な先生から貴重なアドバイスを沢山頂きました。また大学受験期には、2000字の志望理由書、課題文、任意提出資料、3分間プレゼンテーションの動画作成、そして面接対策まで沢山の先生のご協力を頂きました。20 数回にも及んだ志望理由書の添削や模擬面接、そして何度も先生と共に点検したプレゼンテーション動画作成があつてこそ、最難関でありAOの東大といわれる慶應SFCのAO入試、立教大学の自由選抜入試を突破できたのだと思います。本当に先生方にはお世話になりました。この文章を読んでいる皆さんの中には「先生が好きではない」という方もいるかと思えます。大丈夫です。茨中・茨高には、実にたくさんの先生方がいます。きっと、皆さんと相性の合う先生はいます。勉強が出来る、出来ないは先生との相性にかかっています。はじめは緊張するかもしれませんが、だんだんと打ち解けてきます。私もそうでした。ぜひ、入学したら相性の合う先生を探してみてくださいね。

まだコロナ渦ではなかった高校1年の時が6年間の中で最も思い出に残っています。クラスの皆でワイワイ楽しく盛り上がった文化祭、他クラスと熱血対戦したクラスマッチ、教科担当の先生が飛ばしたジョークで皆が笑った授業中、皆で悲鳴をあげた初めての10キロマラソン、コロナで休校命令が出てドタバタで終わった2月、激動の高校1年生でした。しかし今思えば、茨高生らしい生活ができた年でもありました。また、自分の興味関心に基づいた学校外の活動も思い出に残っています。東日本大震災を経験した同じ日本人であるのに被災地に行かないのはどうなのかと思い、初めて被災地に足を運んだ「東北スタディツアー」、消極的な自分を変えたいと思って応募した「高校生外交官」などは、大学進学にも影響を与えています。茨中・茨高には、多種多様な活動が用意されています。これらの活動に興味関心があり参加するのもよし、興味関心がなくて参加しないのもよしです。「ないものは、つくる」(SFCのモットー)、この言葉のように自分なりに行動して、興味関心があるものを「つくる」のもいいかもしれません。この時間をたっぷり使えるのが、中高6年間、一貫教育の強みです。

茨中・茨高の良いところは生徒の本気を本気で応援してくれるところだと思います。高校2年次に、慶應SFC、立教大学をはじめとした幾つかの難関校をAO入試、自己推薦で突破するという目標を立てました。が、学年のある一部の先生から無謀な目標だといわれていました。しかし、「合格したら無謀とはいえない」、この気持ちを胸に、志望理由書の添削をお願いにいきました。1回目は軽いダメ出し、2回目は1回目よりも少し重いダメ出し、3回目は重いダメ出しといった感じでした。ダメ出しに心を折られることもありました。しかし、ここで折れたままじゃ、本気は伝わらないと思い、しがみついて何度も先生のもとへ添削に行きました。そうすると不思議と先生の方も本気になってきます。「絶対に慶應受かるうな」、この言葉を聞いたとき闘志が体中をみなぎりました。質問がてらに相談にのってくださった先生も、はじめは「推薦もそうだが一般も受けたら」とおっしゃっていましたが、「誰に何を言われようと私は本気で推薦やります!」と話したら、「後悔がのこらないように頑張ってください!応援しています!」と本気を認めてくださいました。本気で応援してくださった先生方がいるからこそ、今私に新たな道が開かれています。もしかしたら、皆さんの中にも、これから挑戦することを無謀な目標だと言われて諦めかけている人もいるかもしれません。ぜひ、応援してくれる周囲の人の力を借りて覆してみてください。きっと、輝かしい未来が待っています。

私は、大学進学後、地域コミュニティと防災、アートプロジェクトについて学びを深めていきたいと考えています。

日本は災害大国です。もし、日常から人とのつながりがあれば災害時も助け合いができます。そこで生じる問題も減少します。しかし、人とのつながりが希薄になっているのが現実です。差別もあります。これらの問題を地域コミュニティと防災の観点から、人とのつながりを強固に出来る活動とはどうあるべきか、どうしたら差別がなくなるのか、どうすればアートプロジェクトのような地域活動に興味関心をもってもらえるのか、これらの最適解を求めにいきたいと思います。将来の抱負としては、「報恩感謝」を軸に、社会がより良いものになるよう、よき先導者となって未来社会に貢献することを誓います。